

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 講師

氏名 梶 典幸

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

私は獣医学科において主に獣医薬理学総論、各論および実習の授業を担当している。総論では薬の作用様式や体内動態、有害作用が発生する仕組みといった、薬を正しく安全に使用するために必要な基礎知識について取り扱う。各論では作用する臓器別に代表的な治療薬を説明し、作用機序や適応症、有害作用などについて理解を深める。実習では生きた動物や臓器、シミュレーターを用いて自らの手で薬を処置することで、総論や各論で学んだ知識の定着を図る。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
獣医薬理学総論	獣医学科	必修	3	151
獣医薬理学各論	獣医学科	必修	3	152
獣医薬理学実習	獣医学科	必修	3	145
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5	1
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	1
卒業論文	獣医学科	必修	6	1
総合獣医学	獣医学科	必修	6	175

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

私は獣医学科において主に獣医薬理学総論、各論および実習の授業を担当している。総論では薬の作用様式や体内動態、有害作用が発生する仕組みといった、薬を正しく安全に使用するために必要な基礎知識について取り扱う。各論では作用する臓器別に代表的な治療薬を説明し、作用機序や適応症、有害作用などについて理解を深める。実習では生きた動物や臓器、シミュレーターを用いて自らの手で薬を処置することで、総論や各論で学んだ知識の定着を図る。私の教育理念は正しい知識を持って薬を使用することができる獣医師の育成である。薬物療法は現代獣医療の中心であり、薬を適切に使えることが獣医師になるために必要である。しかし、薬理学で登場する薬物名を単純に記憶しているだけでは真に薬理学を理解したとは言えない。なぜならば、臨床現場において治療薬を使用する際には、治療対象の動物の状態と薬物の性質の両方を見極め、多くの選択肢の中から最適な治療薬を決定することが求められるためである。この目標を達成するためにはまず「薬が生体にどのように作用するかを頭で理解し、自らの言葉で説明できる」能力を身に付ける必要がある。従って、私は記憶よりも理解することを中心に薬理学を学び、自ら薬理学的な観点に立って総合的に判断することで問題を解決できるような学生を育成したいと考えている。また、獣医生理学や臨床系科目との繋がりを意識させることで、獣医学の体系的知識の獲得を期待している。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

授業はすべてPowerPointを用いて実施しており、授業スライドは事前に配布することで、予習を促すようにしている。また、ときに予習問題を課すこともある。毎回、授業の冒頭では獣医学教育・モデル・コア・カリキュラムを参考に、到達すべき目標およびキーワードを明示し、学生が最低限理解すべきポイントを把握できるようにしている。「薬が効く仕組み」を理解するためには、まず健康な動物の生理や解剖の知識が十分にあることが前提となる。そこで、授業では復習を兼ねて、これらの基礎知識について簡単に触れることから説明を始めている。続いて、恒常性を維持する機構のどこに異常が生じることで病気が起こるかを説明し、病態生理と照らし合わせて、どのようにすれば恒常性の破綻を元に戻せるかを示す。そして最後に薬物名とその特徴について簡単にまとめたスライドを用いて各論を説明する。この流れにより、記憶よりも理解に主眼を置きつつ、国家試験のように暗記が必要とされる状況にも対応できるように授業を進めている。また、動物よりもヒトの病気や市販薬の方が身近であることも多いため、これらの話題を授業の中に取り入れることで、学生が薬理学に興味を持ちやすいようにしている。さらに、まだ教科書に載っていない最新の薬物についても発展的内容として取り扱うことで、世界の研究トレンドや薬物開発の動向を知ることができるようにしている。実習では課題として、事前に実験の予想とその根拠について説明をしてもらう。次に薬の投与により生じる変化を実際に観察し、予想との相違やなぜそのような結果になったのかを班ごとにディスカッションと答え合わせを行う。また、統計学的手法や結果の表現方法（グラフ作成など）についても言及することで、科学論文を発表する上で必要な知識も身につくようにしている。さらに、オンデマンド教材を用いて実習の内容の復習を自然にさせることで、理解の促進を図っている。授業後には理解度確認テストを実施し、学生がわかりにくいと感じた内容がないか点検を行っている。さらに、確認テストの最後には自由記述欄を設け、質問や感想を書き込んでもらうことで、学生の声を聞き、内容を授業にフィードバックするようにしている。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

実習で得られた結果を各自で考え、班の中で共有し、最後に教員に対して説明した後に、教員から更に解説を行うことで、理論的な思考力や科学的コミュニケーション能力を養うようにしている。

(2) ICTの教育活用

有

インターネットに公開されている動画資料にアクセスし、実験手技や授業内で取り扱うことのできない内容について学習できるようにしている。また無料で公開されている計算システムの利用、さらにシミュレーターを利用することで、動物使用数の削減も同時に達成した。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

前年度に引き続き、総論・各論については必ず理解すべき内容と発展的内容が分かりやすいようにスライドに明記することで学生が自身のレベルに合わせて情報を取捨選択できるように工夫をした。また、分かりづらかった説明箇所のスライドを作り直すことで、伝わりやすい授業資料の作成に努めた。さらに、臨床科目の授業で用いるスライドを参考にして、臨床科目で学習する内容と薬理学の知識が結びつくように工夫をした。実習ではこれまでと同様に授業で学んだ内容との繋がりが理解しやすいように、事前説明で再度、授業内容を復習するとともに、実習のプロトコルを改善することで、理解しやすい内容となるように工夫をした。時間や内容の都合上、授業中に取り扱うことのできなかった項目については、実際の実験データを示し、考察をしてもらうことで、可能な限り多くの薬について考える機会を提供した。

(2) 学生の理解度の把握

A

昨年度に引き続き授業毎に選択式の理解度確認テストを実施することで、点数を指標として授業内容にわかりにくい箇所がなかったかどうかを点検した。テストの最後にはコメントを記入できるフォームを設置することで、学生からの反応が得られるようにした。また、課題を通じて薬理学に関する知識を学生自身の言葉で説明できるようになっているか、把握するようにした。実習では、学生と積極的に会話することで、どれくらい理解できているかを把握するように努めた。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

これまでと同様に引き続き資料は授業の事前に掲示し、予習を促すようにした。また、実習の課題では、次回の項目の結果について予想をしてもらうことで、自然と予習ができるようにしている。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

個別の疑問についてはメールまたは理解度確認テストに自由記述欄（前述）を設けることで、気軽に質問できるようにした。質問が出た箇所については、当該学生だけでなく、授業内で質問と回答を共有した。質問は授業の内容に限定せず、薬理学に関連する内容であれば全て受け付け、可能な限り丁寧な説明を行った。

(5) 双方向授業への工夫

B

実習については班ごとにディスカッションの時間を設けることで、知識の確認だけでなく、学生の理解度に応じて発展的な内容の説明を行った。また、コミュニケーションを通じて科学的に正しい説明をするための訓練も同時に実施した。実習ではこちらから一方的に説明するのではなく、学生が会話の中で疑問に自ら気づき、答えにたどり着けるように工夫した。座学については授業時間の関係上、実施できていないので、今後工夫が必要であると感じている。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

国家試験対策として総合獣医学の授業を担当した。授業資料には国家試験に合格するために必要な情報を過不足なく記載することで、辞書的な役割を担う資料の作成を心がけた。また、近年の薬理学分野の傾向を詳細に分析して、その重要性を伝えた。また、3年生の各論・総論の授業においても国家試験を意識した授業、および国家試験に準じた問題を定期試験で出題することで、早い時期から国家試験を意識してもらおう工夫をした。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

昨年度の授業に対する評価は比較的高かったため、概ね同様の方針で授業を実施した。一部、実習時の説明が難しいという意見があったため、図などを新たに作成し、よりわかりやすい説明を心がけた。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

概ね好意的な評価をいただけたと思われる。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

来年度以降もこの取り組みを続けていきたいと考えている。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

大学生であれば疑問を自ら調べて解決する能力が必要であるが、初歩的な質問であっても教員に質問しやすい雰囲気（態度）を心がけている。また、学習意欲は授業の質に大きく影響されると考えているので、十分な準備を怠らないようにしている。さらに、各科目がそれぞれ独立していると考えている学生が多いため、科目同士がどのように繋がっているかを意識できるように位置づけを明らかにすることで、体系的な知識が獲得できるよう心がけている。具体的には各項目のはじめには対象臓器の解剖や生理を簡単にまとめたスライドを入れるようにしている。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

本学が実施する授業評価アンケートにおいて、比較的好意的なコメントをいただいた。また、独自に実施した薬理学実習内でのアンケートでは「楽しかった」、「もっと勉強したい」、「苦手意識があったが、サポートのおかげで最後まで学習することができた」というコメントをいただき、薬理学についてプラスのイメージを持ってもらうことができた。また、実習については「自然と予習・復習ができる構成になっていて勉強しやすかった」というコメントを複数いただくことができ、学びやすい状況を作ることができたと思われる。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

大学が主催しているFD講習会に概ね参加している。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

引き続き、基礎的な薬理学の知識だけでなく、最新の、特に獣医臨床に関係するような情報を積極的に取り入れることで、より生きた知識を学生に伝えられるよう、自身で勉強する努力を行いたい。また、近年の獣医師国家試験において薬理学は安定した得点源となる可能性があると考えており、生きた知識のみならず、国家試験にも対応できる資料作りや授業を行いたいと考えている。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

シラバス、理解度確認テスト、レポート課題、試験問題、授業資料、FDプログラムなどへの参加記録、授業評価データ、授業に関するコメント